早稲田大学教育学部　学術研究（国語・国文学編）第57号　29～37ページ，2009年２月

日本と中国における「漢文教育」の比較研究

―杜甫の「春望」の場合―

丁　　秋　娜

一　問題意識

日本の漢文教育は大きな危機を迎えているとよく言われている。この状況に対して，漢文教育の関係者たちが積極的に対応を進めているにもかかわらず，教育現場では，古典よりは現代文が重視され，また古典において漢文よりは古文に傾斜する教育を行う風潮が広がっている。

一方，中国では，清末に「語文」科（日本の国語科に相当）が設立されて以来，古典教育[i]は百年近くの歴史を持っている。五四運動前後の「文白之争」[ii]に代表される，語文教育における古典教育の位置づけ・必要性に関する論争が絶えず，諸説が唱えられてきたにも関わらず，教育現場では，教員たちの古典教育を重視する姿勢が一貫して変わらず，古典教育が盛んに行われている。

漢文はあくまでも原文が中国語であるため，日本の学習者にとって一種の「外国語」と言っても過言ではない。一方，中国の場合は，現代語と文言語の間に大きな隔たりがあるため，現代中国人には古典作品が読める人は少ない。漢文が日常と疎遠になっている現代，なぜ学ばなければいけないのか，そして，漢文をどのように継承し，発展させていくのか。この問題は，日本と中国が共に抱えている課題である。

先行研究を見た限りでは，日本と中国の間での古典教育についての交流は決して多くはない。両国の漢文教材についての比較研究報告は２，３本ほど散見されるが，管見によれば漢文教育の目的・指導法・評価などについての比較研究は見当たらない。

そこで本稿では，日本の学習指導要領と中国の語文課程標準[iii]における漢文教育に関わる内容を踏まえて，日本と中国が共通に教材として採用している作品「春望」（杜甫）を取り上げ，それぞれの国でどのように教材化され，実践されているのかを考察・分析する。

なお，「春望」を取り上げる理由としては，①日本でも中国でも有名な作品であること，②「春望」を扱う学年は，日本では中学３年で（高校の国語科教科書に収録される場合もあるが，中学校の方が比較的多い），中国では中学２年であることから，生徒たちが学習する学年が近いため，比較しやすいことの二点が挙げられる。

二　学習指導要領（課程標準）における漢文教育に関わる内容の比較

「春望」は日本でも中国でも主に中学校の国語科教材として使用されているため，両国の古典教育方針の考察・比較を主に中学校の学習指

導要領（課程標準）を踏まえて行うこととする。

1　日本の学習指導要領における漢文の指導

2008年３月に新しい小・中学校学習指導要領が告示された。学習指導要領の改訂により，小学校から古典指導が系統的に導入され，中学校ではそれを踏まえて，より一層古典に親しみ，古典を読む能力を養っていくことが求められるようになった。

以下，改訂された『中学校学習指導要領』より「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の「ア伝統的な言語文化に関する事項」における古文・漢文指導に関する指導事項を引用する。

〔第１学年〕

(ア)文語のきまりや訓読の仕方を知り，古文や漢文を音読して，古典特有のリズムを味わいながら，古典の世界に触れること。

(イ)古典には様々な種類の作品があることを知ること。

〔第２学年〕

(ア)作品の特徴を生かして朗読するなどして，古典の世界を楽しむこと。

(イ)古典に現れたものの見方や考え方に触れ，登場人物や作者の思いなどを想像すること。

〔第３学年〕

(ア)歴史的背景などに注意して古典を読み，その世界に親しむこと。

(イ)古典の一節を引用するなどして，古典に関する簡単な文章を書くこと。

これらの事項について『中学校学習指導要領解説――国語編』（文部科学省，2008）によれば以下のように解説されている。すなわち，中学校段階では，訓読の仕方など漢文の学習に必要な基礎的な事項を「教材に即して指導したり，必要があれば取り立てて指導したり」するとし，音読などを通して古典特有のリズムを味わわせるとともに，登場人物や作者の心情などを想像できるような指導が求められている。また，「作品の理解に役立つ事柄を精選して取り上げ」，古典を読む際に「歴史的背景」を注意させ，古典への興味・関心を高めることも示されている。さらに，古典の一節を引用して感想文などを書くことを通して，「古典により一層親しむ態度を育てるとともに，伝統や文化についての関心を深め，これを継承・発展させようとする態度の育成にもつながる」とされている。

中学校での漢文指導は，小学校と高校での漢文学習を結ぶ「橋渡し」としての役割を持っている。小学校段階の指導は朗読・音読に重点が置かれており，漢文の持つ独特のリズムや響きを感じ取り，親しみを持つことが重要視されている。従って，中学校の漢文指導においては，小学校段階の指導を踏まえて，朗読を重視しながら，文法・ジャンル・内容・思想・歴史的背景など様々な指導が行われるように求められている。なお，「触れる」「知る」「想像する」などの文言に示されているとおり，それらの指導はあまり深入りせずに，高校での学習へつながるように，基本的な事柄にしぼってよいと考えられる。

2　中国の課程標準における古典の指導

中国では，小学（６年）・中学（３年）の９年一貫教育カリキュラムが実施されている。現行の『全日制義務教育語文課程標準』（小・中学校）」の「総目標」では，古典教育の目標として，「辞書などの助けを借りて平易な文言文

を読めること」が明確に示されている。つまり，義務教育の9年間に，平易な文言文を生徒たちが自力で鑑賞できるようになることが求められている。

続いて，『課程標準』には「第四学段7～9年」（中学1～3年）「閲読」（読むこと）における文言文の指導について，「古代の詩文を朗読し暗唱する。（文言文に関する知識の）蓄積，体得と運用により，意識的に自らの鑑賞力と審美情趣を高める。注釈や辞書などの助けを借りて平易な文言文を読めること。優秀詩文を80篇暗唱すること」とある。内容理解と文章のリズムを味わうことをねらいとし，音読朗読はもちろんのこと，暗唱活動も大いに推奨されている。中学3年間で「優秀詩文を80編暗唱する」という具体的な目標数値が明記されているほか，小学校6年間ではすでに160編の作品を暗唱するように求められている。つまり，義務教育の9年間に合計240編の漢詩文を暗記することが義務付けられている。中国ではいかに暗唱活動に力を入れて取り組んでいるかがわかる。また，「鑑賞力と審美情趣を高める」とは，語句の意味と用法，作品内容の理解，構成などを読み取るだけでなく，表現の優れたところ，作品全体の雰囲気を味わえる審美力と，作者の考えや感情，作品の内容と思想について適切に評価できる鑑賞力を育てることを意味する。さらに，「意識的に」自分たちの古典素養を高めることから，生徒たちに強い自覚が求められていることがわかる。

以上，日本と中国における中学校の漢文教育の指導方針を分析・考察してみた。従来，日本の漢文教育は中等教育に至って初めて導入されるようになる。それに対して，中国の場合は，小学校から文言文教育を行い，特に暗唱活動が充実しているため，生徒たちは中学校に入学するまでにすでに基礎的な古典知識を身につけている。このように，中学校段階の漢文教育に着目すると，日本と中国の間に大きな差が見られる。

なお，日本では学習指導要領の改訂に伴い，漢文を扱う指導の開始が小学校段階まで引き下げられた。また，この改訂で，朗読，音読，暗唱などを積極的に取り入れることにより，漢文教育の現状を改善することになると思われる。

三　「春望」（杜甫）の教材研究

1　「春望」の教材化について

中国では現在，語文教材は数多くあり，それぞれの教材の構成も異なっている[iv]。「春望」はすべての出版社の教材に掲載されており，使用学年は8年上（中学2年上）にほぼ定着している。各教材の構成状況によって，文言文作品を独立した古典単元に収録したり，または主題やジャンルによって分類し，現代文と同じ単元に収録していたりする。また，「春望」の場合は，単独で扱われることはあまり見られず，ほかの唐詩と組み合わせて一教材となることが多い。例えば，人民出版社から出版された教科書では「望岳」「春望」「石壕吏」の3首を一課とし，「杜甫詩三首」という題名で，「名作鑑賞」という単元に収められている。杜甫はそれぞれ三つの時期にこの3作品を作ったため，年代順に鑑賞することによって，杜甫の創作風格の変化や当時の社会的状況の変遷への生徒たちの理解と認識を深めることにつながると考えられる。一方，江蘇教育出版社の教科書では，「春望」を，陸遊の「十一月四日風雨大作」など他3首

とともに，「愛国情懐」（愛国）という単元に収録した。

教材提示の仕方について，人民出版社の教材においては，「杜甫詩三首」という題目の下に，作品の解説が付いている。この3作品を学習する際，年齢の違いによる杜甫の詩風の変化に注意する，という読みのヒントが示されている。「詩史」[v]とも呼ばれる杜甫の詩の特徴としては，社会の現状を直視したリアリズム的な詩を作っていたことである。注釈は「春望」（出典，時代背景についての説明），「城」「簪」と三つである。「検討と練習」では，まずこの3首の詩を暗唱することと，「感時花濺涙　恨別鳥驚心」についての理解と作品中の対句を抜き出すという二つの問題が用意されている。

日本の場合，平成18（2006）年版の中学校国語教材では，「春望」は光村図書以外全社に取り上げられている[vi]。教材提示の形態はさまざまであるが，「訓読文＋書き下し文＋脚注＋学習の手引き」というパターンが多く見られる。また，必要に応じて，解説や口語訳などを付け加えている場合もある。

中国の教材と比較して，日本の「春望」の教科書教材は次のような特徴が見られる。

①活字が大きくて見やすい。写真，挿絵も鮮明で視覚的インパクトを与えている。

②絶句と律詩という二つの形式を生徒たちに体験させるため，必ず李白の絶句と一緒に掲載されている。

③「春望」になると，必ず松尾芭蕉の『おくのほそ道』に影響を与えたことに言及する。漢詩の学習への動機付けとして，漢詩が日本の文化や伝統とつながりがあることを意識させる。

④「学習の手引き」における暗唱の要求について，中国では教材として収録されている唐詩をすべて暗唱するように求められているが，日本では各自好きな詩を選んで暗唱すればよいと記されている。暗唱に対する要求の厳しさが違うことがわかる。

2　「春望」作品の理解について

杜甫の「春望」は，時代背景と詩人の心情の読み取りは現代の中学生にとっては難しいと思われるが，詩自体は比較的易しい言葉が用いられ，難しい典故もない。注釈を参考にしながら書き下し文に従って読めば，大まかな内容は読み取れると思われる。内容の深さと表現の平易さをもって，「春望」は日本でも中国でも中学校の定番教材として使われてきた。

しかし，詩に表現された情景や心情をより深く読み取ろうとすると，意外に具体性に欠け，意味がはっきりしない面がある。特に前半は「国，城，山河，草木，時，別，花，鳥」と包括的で抽象的な名詞が並べられており，イメージを持たせやすいが，具体的な意味を追究しようとすると，当時の杜甫の心境，彼を取り巻く背景について読み手が理解するプロセスが不可欠である。教員側はこの作品を理解させるために，まず安史の乱についての知見を得て，杜甫が賊軍に捕らえられ長安に軟禁されたという複雑な状況を扱う必要がある。激動の歴史を真正面から捉えたこの作品を中学3年生に学習させることは，非日常的な戦乱の状況と杜甫の悲しみと憂国の感情を読み取らせることに価値がある。さらに生徒たちの視野を広げて心情を豊かにし，漢文への関心を深めることにもつながっている。

「春望」の作品理解について，日本と中国では大きな差がないと思われる。ただし，日本では，首聯の「国破山河在，城春草木深」は，戦乱によって荒れ果てた長安の春景色を眺めていた詩人が，はかない人の世と不変の自然とを，対句を用いて見事に詠っており，古今の絶唱とされている。そして松尾芭蕉の『おくのほそ道』にも引用されることにより，きわめて知名度が高い。一方，中国では「国破山河在」という句はもちろん有名であるが，頸聯の「烽火連三月，家書抵万金」が手紙や文学作品などによく引用されるため，人口に膾炙するようになった。戦乱に巻き込まれた杜甫の家族を思う感情が十二分に表現されており，人々に深い感銘を与えている。

四　「春望」の教育実践についての考察

前に述べたように，古典学習の導入時期に関して，日本と中国では大きな相違が存在している。日本では，中学校から古典作品を教材に取り上げるのに対して，中国の場合は，小学校はもちろん，幼稚園から唐詩を丸ごと暗記させたりすることも当たり前のようになってきている。よって，本稿の研究対象である「春望」は，日中両国の中学校の教材に取り上げられているものの，日本の中学生たちにとっては，漢詩の入門教材であり，初めて接する新鮮な文学ジャンルであるのに対して，中国の生徒たちにとっては普通の唐詩教材に過ぎない。また，日本では，同一教材が中学校・高校両方の教科書に載っており，生徒はこの教材に2回出会う可能性がある。東京書籍の中学校と高校の教材書に「春望」をともに掲載されているのがその例である。同一教材を繰り返し学習することにより，深く学ぶ効果が期待されるが，中学校段階の漢文指導において，徹底した指導ができなくなることにつながるかもしれない。それに対して中国ではこういった教材上の重複は見られない。

以上二つの事情により，「春望」を授業で扱う際，日中両国の指導に大きな相違が見られる。つまり，日本の授業は，漢字ばかり並んでいる漢詩への生徒たちの抵抗を和らげ，漢詩に親しむ態度を育てることに主眼を置く。それに対して，中国の場合は，「春望」の教材としての価値を最大限に活用し，多様な学習活動を展開する。以上のような指導上の異なる傾向が考えられる。

それぞれの指導の実態は，学習指導案の分析を通してその概要が把握できると考える。そこで，本稿では，比較研究という目的に配慮して，現場の教師たちが参照する『教師用指導書』に例示される学習指導案を取り上げることとする。

1　日本の場合（配当時間＝1.5時間）

【指導の目標】

①「春望」の基本的な形式を知り，書き下し文の音読に慣れる。

②「春望」の鑑賞を深めながら，作者の心情や情景を読み取り，古典への理解と親近感とをいっそう深める。

【指導の具体例】

① 範読の後について音読する。

② 脚注を参考に現代語訳し，ノートに記入する。

③ 現代語訳を確認しながら，内容や表現についての理解を補う。

④ 杜甫について資料集などで調べたり，授

業者の説明を聞いたりする。
⑤ 漢語的な表現や対句表現，助詞を省いた簡潔な文体など，漢詩（書き下し文）の表現上の特徴に注意して繰り返し音読する。
⑥ 作者の思いが表れている表現に注意し，その心情を想像しながら朗読する。何名かが発表を行う。
⑦ 作品や杜甫のものの見方・考え方について感想を書く。

※『新しい国語３教師用指導用書』（授業実践編）
東京書籍1997.3

この学習指導案は，書き下し文を中心に据え，注釈を参考にしながら現代語訳し，詩の大意をまとめるといった基本的な事柄にしぼっている。また，積極的に朗読と暗唱をさせることによって漢詩のもつ独特のリズムに慣れさせて，漢詩は見た目よりやさしく，楽しいものとして生徒たちの興味関心を喚起する工夫を凝らしている。さらに，作者の心情やものの見方・考え方について考えさせ，生徒たちの読みを深めることを図っている。また，「春望」が入門期の漢詩であることを配慮し，実際に指導する際，漢詩の表現上の特徴を作品に即して注意させる程度での指導を心がけることが求められる。

2　中国の場合（配当時間＝１時間）

【指導の目標】
① 時代背景を理解し，詩の内容を捉える。
② 詩人杜甫の憂国憂民の思いや家族を思う気持ちを理解する。
【指導の具体例】
① 導入
時代背景と杜甫について説明する（教材に関わる内容のみ紹介する）。
② 理解と鑑賞
・注釈や辞書を参考に詩の内容を理解する。
・理解しがたい箇所を生徒が質問し，全員で話し合う。
③ 内容と表現の探究
・対比の作法を使った首聯について自分の理解を述べてみよう。
・「感時花濺涙　恨別鳥驚心」の二句についてあなたの理解を述べてみよう。
④ 朗読
自由朗読，教師の範読，指名朗読，斉読などを行う。
⑤ 読み比べ
杜甫の作った律詩「聞官軍収河南河北」を読んで杜甫の心情を読み取り。「春望」に表れた心情と比較する。
⑥ 教師のまとめ。
⑦ 宿題
・「家書抵万金」をテーマにし，短作文を作ってみよう。
・先生から教わった漢詩鑑賞の方法を使って，好きな漢詩を選んで鑑賞してみよう。

※『語文　課堂教学設計と案例』（八年上）
人民教育出版社　2007.3

この学習指導案から授業の流れを見ると，時代背景と詩の成り立ちからスタートし，作品内容，詩人の心情を読み取り，表現の優れたところを鑑賞する。続いて，多様な朗読活動を通して作品を暗記し味わう。最後に，検討活動，読み比べと作文を通して読みを深める，といった展開である。「読む，聞く，話す，書く」の四

項目に対応して，様々な学習活動が取り入れられている。

現在中国の国語教室では，パワーポイントなどの視聴覚機器を使って授業する教師が多くなってきている。視聴覚機器の導入は，古典の授業に新しい可能性をもたらす。例えば，作品の導入する部分においては，教師が口頭で説明するより，実際の写真や映像を見せることが，より生徒たちの理解を助けることになる。また，音読・朗読の際も，教師の代わりに，CD による詩の範読を聴いたり，BGM を流して詩の雰囲気を作ったりすることは，生徒たちの興味・関心を喚起するとともに，作品理解の手助けにもなる。

「読み比べ」に使われていた「聞官軍収河南河北」という詩は，人民教育出版社の第12冊（小学 6 年生用）の国語教科書に収録されているため，「春望」と比較して読むことは，それまでに習った内容を復習する意味もある。10年近く続いた「安史の乱」が終わった時に作られたこの詩は，「春望」の「憂」に相反して杜甫の「狂喜」の気持ちを表している。なお，「喜」と「憂」という全く違うように見えるが気持ちは，実は共に杜甫の「愛国心」を反映している。そこでこの 2 首の詩を読み比べることによって，生徒たちの理解をより深くする効果が期待できる。

3　両国の学習指導案の比較からわかること

以上の二つの学習指導案から授業の流れを見れば，この詩の指導法にそれぞれの国の特徴が明らかになる。その共通点と相違点を要約すると，以下のようである。

3．1　共通点

日中両国は，時代背景と詩の成り立ちからスタートし，注釈などを参考にして内容を理解させ，詩人の心情を読み取らせる，という授業のおおまかな流れが一致している。漢詩は日本人にも中国人にも理解しがたいため，まず意味の読解をしてから詩の鑑賞を行う流れは日本にも中国にも同じである。

また，二つの学習指導案とも音読朗読活動を積極的に取り入れている。特に，日本の場合，音読朗読が少ない現代文の授業に対して，古典の授業では音読に始まり，音読（暗唱）に終わると言ってもよいほど，音読を漢文学習の基本方法として意欲的に授業に取り組んでいる。繰り返し音読させることは，漢字の読みや意味の確認ができ，文章理解の手助けになる。

3．2　相違点

続いて相違点に関しては，次の六点が考えられる。

①日本の場合，訓読の方法によって書き下し文を中心に指導するのに対して，中国では，原文のままで読まれている。書き下し文を中心に漢文を学習すると日本語の文章のように読むことが可能になり，入門期の漢文指導にはふさわしいと思われる。

②中学校段階の漢文指導の目標について，日本の場合は，訓読のきまりを知り，漢文の独特のリズムに慣れることを狙いとし，漢文に親しむ態度を育てることに主眼を置いている。それに対して，中国の場合は，教師側の漢詩のおもしろさを生徒たちに伝えようとする様々な工夫が見られる。特に発表・討論の比重が増えた傾向は従来の指導の仕方とは異なるため，注目すべきである。例えば，「感時花濺

涙　恨別鳥驚心」という詩句には主語が「私」なのか「花，鳥」なのか，という二つの説がある。教師は回答を与えるのではなく，詩句の解釈について生徒間で意見交換を行わせることによって，自分たちの力で作品をより深く読ませることを強調している。

③中国では詩の暗唱に重点が置かれているのに対して，日本では詩教材は暗唱すべきものという暗黙の了解はないようである。中国では，テストなどを頭に置きながら授業する時は，教師の指導は，音読朗読よりも暗唱が中心になりがちである。それに対して，日本の場合は「暗唱できるまで繰り返し音読しよう」「好きな詩を選び，暗唱してみよう」など，暗唱を朗読の延長線上に位置づけるような学習の課題が多く見られる。

④日本の場合，「音読→書き下し文→口語訳→内容探究」という従来のパターンがあるように，口語訳は漢文教育において重要な一環として位置づけられている。それに対して中国の教室では，詩を現代語訳させることは少ない。教材本文に詳細な注がついているため，言語上の障壁が少なくなった。詩の大意が把握できれば，特に現代語訳する必要はないとされる。そして，漢詩は漢字の特徴を最大限に活かし，詩の凝縮性・解釈の不定性にこそ詩の魅力があると認識され，現代語に訳されれば，漢詩の醍醐味を味わうことができなくなるという配慮もあったと思われる。

⑤中国では，唐・宋時代の古詩の充実は，その言語表現に学ぶというねらいもある。古詩には，現代文に見られない表現の力を内包している。比喩・誇張・対比・擬人法など多種多様な修辞法が使われているため，児童・生徒たちに修辞法を学ばせるには好教材となっている。また，優れた表現を学ぶことは祖国の言語文字を愛する心を育てることにもつながると思われる。

⑥中国では，古典教育を貫いているものは「文道統一」であり，作品中の思想・文化を強調し，児童・生徒たちにその真髄を汲み取らせ，昔のものを今に役立てようと図っている。よって，古典教育には倫理的・思想的・教訓的な内容が配列されており，古典作品を指導するとともに，思想教育も展開されている。古典の学習を通じて，親孝行・兄弟愛・友情・大自然に対する愛・愛国心など儒教倫理や人生訓が教えられている。例えば，「春望」の授業をする際，作者杜甫の「愛国」の気持ちが強調されている。そういった意味では，小学校から漢詩漢文を導入することは，国を愛し，民族を愛する徳性を養うというねらいもあったと思われる。

五　おわりに

本稿では，日本と中国の漢文教育に関して，両国の古典教育に関する指導方針を踏まえつつ，中学校の国語教材「春望」（杜甫）を中心に，教材研究や学習指導案を紹介し，その共通点と相違点を分析・考察した。

漢文の学習内容には，日本人の心に通じる内容が多く含まれている。漢文教育を通して，日本と中国の若者の間のコミュニケーションに共通の話題ができる。また，文章表現においては，美辞麗句を用いるのではなくても，普段書く文章の中には，漢文的な表現はたくさん使われている。それらの表現を避けると冗長な表現になってしまう。こういう意味で，漢文教育の意義を

見直す必要がある。

中国の古典教育の現状や経験を視野に入れ，日本の漢文教育の在り方を問い直し，活性化する方法を考えることは日本の漢文教育に資すると思われる。

なお，一口に「日本と中国の漢文教育の比較研究」とは言っても，日々変化の激しい現代社会，また一つの国に限っても学校それぞれ（教員それぞれと言った方がいかもしれない）の教え方が異なっている。どのような指導例を持って日中両国の漢文教育の典型，もしくは代表的姿と見えるかは，容易に決められることではない。それで，本稿はとりあえず中国の人民教育出版社が出版した教材と教師用指導書と，日本の中学校五社の出版社のうちの東京書籍のものを取り上げて，比較研究の対象とした。今後，できるだけ多くの実践を集めて比較研究をしたい。同じ漢文教材を共有しながら，お互いの国でどのように教えられているかを研究することは両国の漢文教育に資することになると思う。そこに本研究の意味もある。

〔参考文献〕

1　文部科学省『中学校学習指導要領解説　国語編』2008年
2　田部井文雄『漢文教育の諸相―研究と教育の視座から―』大修館書店2005年12月
3　江連隆『漢文教育の理論と実践』大修館書店1984年10月
4　青木五郎「日本における漢文教育について―教材を通じてみた中国の文言文教育との比較」『新しい漢字漢文教育　29』1999年５月
5　吉原英夫「古典教材の充実と漢文教材の見直し」『月刊国語教育研究』日本国語教育学会編2008年３月
6　周慶元『語文教育研究概論』湖南人民出版社2005年８月

【注】

i　日本で漢詩・漢文のことは中国で「文言詩文」（文語文）と呼ばれる。よって，中国では古典教育のことを「文言文教育」という。詳細は丁秋娜「中国における『漢文教育』の特質を探る―日本の漢文教育の改善に向けて―」（『学術研究―国語・国文編―』第56号2008.2）を参照。

ii　五四運動前後に起こった，文言語と白話をめぐる論争。

iii　日本の学習指導要領に相当。本稿では，「語文課程標準」に関わる内容の日本語訳は筆者によるものである。

iv　従来，小学校・中学校・高等学校の教科書は，人民教育出版社（国家教育部の直属機関）が全国共通の国語教科書を１種類だけ作成していた。しかし，各地域の多様な需要や，生徒の多様な学力に対応するため，1980年代後半から，教科書を多様化する改革が進められた。ただし，人民教育出版社は引続き教科書の編纂を行っている。「詩史」とは詩による歴史という意味で，杜甫が現実を反映する詩を多数創作したことから，現実詩人と言われ，その詩も歴史の詩と呼ばれている。

v　「詩史」とは詩による歴史という意味で，杜甫が現実を反映する詩を多数創作したことから，現実詩人と言われ，その詩も歴史の詩と呼ばれている。

vi　中島和歌子のページ（北海道教育大学教育学部札幌校古典文学研究室　URL は 2008 年現在のもの）http://www.sap.hokkyodai.ac.jp/~nakajima/waka/data/kotenj18.html